

長生稲作情報 第7報

(2021年10月22日発行)

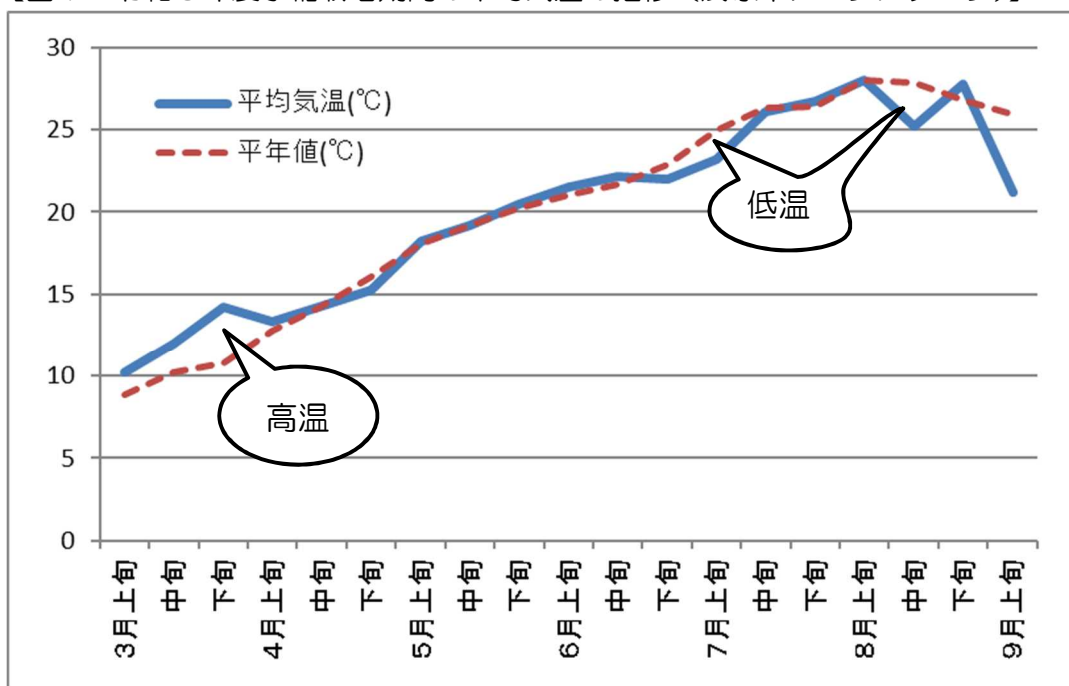
長生農業事務所 改良普及課
電話 0475-22-1771

◎長生地域令和3年稲作の振り返り

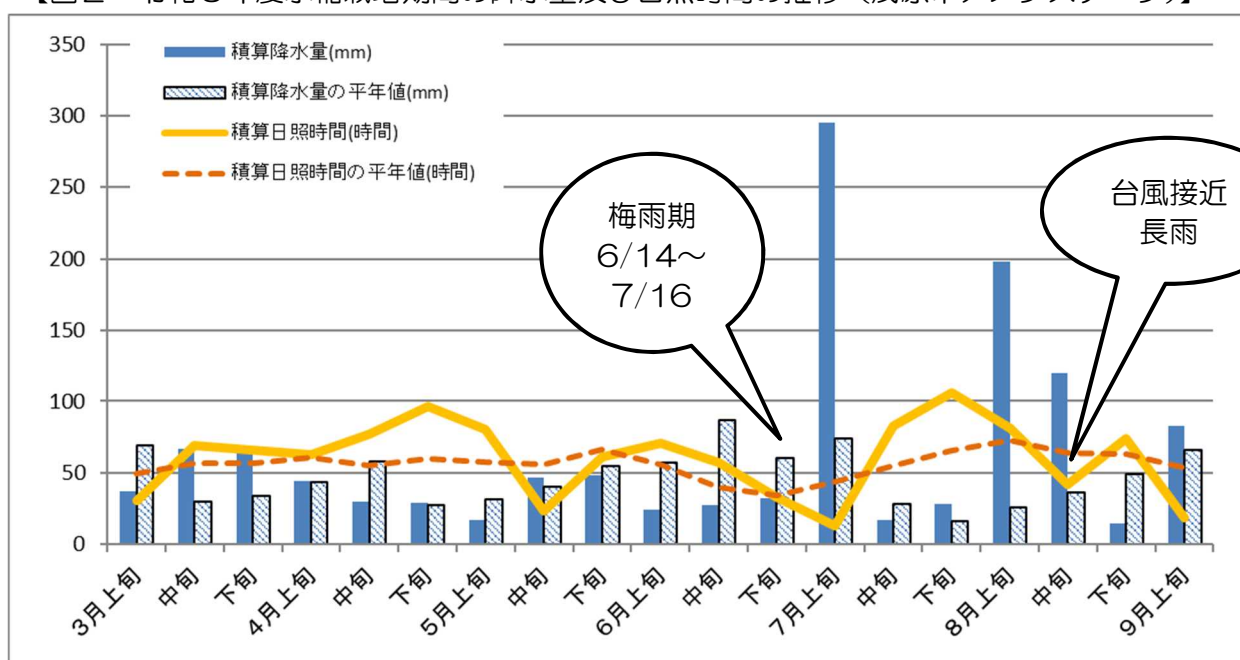
管内水稲生産者の皆さま、今年も水稲の栽培大変お疲れさまでした。

米を巡る環境は、気候変動による栽培管理の難化や新型コロナウイルス感染拡大の影響などによる米価の低迷など大変厳しい状況となっておりますが、今年の振り返りを踏まえて来年の栽培への改善につなげていきたいと思っております。

【図1：令和3年度水稲栽培期間の平均気温の推移（茂原市アメダスデータ）】



【図2：令和3年度水稲栽培期間の降水量及び日照時間の推移（茂原市アメダスデータ）】



(1) 育苗期～移植期

今年の3月は観測史上気温が最も高く、3月播種の育苗は非常に生育が早まり、田植の開始も例年よりやや早い傾向が見られました。しかし、4月中旬からは、低温傾向となり、強風の日も多く、活着が遅れて初期の生育は抑制傾向となりました。その後、5月下旬からは天候が安定し、生育は平年並に追いついてきました。

(2) 幼穂形成期～出穂期

幼穂形成期、出穂期のタイミングはほぼ平年並となり、5月植えの晩生品種については、やや早くなりました。梅雨入りは平年より7日遅く、梅雨明けは3日早くなりました。6月下旬～7月上旬は低温・多雨となり、この時期に葉いもちの発生が目立ち、後に穂への感染拡大の要因となりました。

(3) 登熟期～収穫期

梅雨明け以降の天候は安定し、登熟は順調に進み、登熟のタイミングは平年並となりました。しかし、晩生品種の登熟後期の8月中旬頃に台風の接近や長雨・低温期があり、特にコシヒカリでは早期の倒伏被害が多くなり、収穫開始も遅れました。その後も9月上旬には定期的な降雨があり、収穫作業に苦労された方も多かったかと思えます。

(4) 作況、品質について

農林水産省が公表した令和3年度の作況指数（9月25日現在）は、全国100、千葉県全体101、九十九里地区100となり、平年並みとなりました。傾向としては、全もみ数がやや多く、登熟は平年並みでした。品質については、管内の1等米比率（農協出荷）は9割以上となり概ね良好でしたが、コシヒカリなどの晩生品種では、乳白米などの白未熟粒が多い傾向となりました。

◎主要品種生育調査結果について

(1) 水稻の収量構成要素

作物の収量を規定する形質要素であり、気象や栽培管理が収量に及ぼす影響を解析する際の指標になります。イネの場合は「㎡当たりの穂数」「一穂当たり粒数」「登熟歩合」「千粒重」の4つの要素からなります。これを用いた計算収量の式は、以下のとおり
「 $\text{単位収量 (g/㎡)} = \text{穂数 (本/㎡)} \times \text{一穂粒数} \times \text{登熟歩合 (\%)} \times \text{千粒重 (g)}$ 」

(2) 主要品種生育調査結果について

当事務所で実施した主要品種生育調査結果は、次ページの表1、表2のとおりです。
「ふさおとめ」：登熟期間の天候に恵まれ、登熟歩合、玄米千粒重の値が良好でした。また、㎡当たり穂数も多く確保できたことから平年より高い収量となりました。
「ふさこがね」：㎡あたり穂数は多かったが、登熟期に肥料切れを起こし、登熟歩合や玄米千粒重の低下につながりました。また、紋枯病の発生も多くなりました。
「コシヒカリ」：8月の台風により早期に激しく倒伏し、刈取作業が難しい状態となりました。また、倒伏や登熟期の悪天などで登熟歩合も低くなりました。

「粒すけ」：倒伏はほとんど見られませんでした。籾数が過剰となったことや登熟期の悪天などで、登熟歩合や玄米千粒重が低くなりました。

表1 主要品種生育調査ほ施肥設計等

品種	基肥 (kg/10a)			追肥 (kg/10a)			栽植密度 (株/m ²)	植付 本数
	N (速効：緩効)	P	K	N	P	K		
ふさおとめ	5.6	7.2	5.6	3.4	0	3.4	19.6	5.5
ふさこがね	7.2 (2.0：5.2)	4.2	3.3	0	0	0	18.1	4.0
コシヒカリ	5.6	7.2	5.6	2.2	0	2.2	18.1	4.7
粒すけ	9.0 (4.0：5.0)	5.4	6.3	3.3	1.5	2.0	18.5	3.0

表2 主要品種生育調査結果

(農家収穫日 ふさおとめ：8/11、ふさこがね：8/19、コシヒカリ：8/21、粒すけ：9/6)

品種	場所	年	移植日	穂数 (本/m ²)	一穂 籾数	登熟 歩合 (%)	玄米 千粒重 (g)	計算 収量 (kg/10a)	農家 実収 (kg/10a)
ふさ おとめ	茂原市 (長尾)	2021	4/11	509	66.9	86.8	23.6	697	612
		参考値	4/15	466	64.2	83.6	22.8	574	544
		県平均	4/23	439	59.7	87.4	23.4	537	540
ふさ こがね	茂原市 (七渡)	2021	4/15	495	69.9	83	22.1	634	500
		参考値	4/17	434	71.2	83.7	22.7	587	543
		県平均	4/21	435	74.5	88.6	22.9	655	591
コシ ヒカリ	茂原市 (長尾)	2021	4/13	514	83.4	81	20.6	714	510
		参考値	4/15	481	82	82	20	649	552
		県平均	4/22	389	77.9	82.7	21.4	533	521
粒すけ	長生村 (信友)	2021	5/4	439	92.9	75.7	22.8	694	570
		県平均	5/1	391	79.1	82.1	23.4	589	585

※参考値は、同調査地点の「ふさおとめ」過去5か年、「ふさこがね」過去2か年、「コシヒカリ」過去3か年の平均値です。また、県平均は今年度の県内他調査地点の平均値です。

※農家実収は、調査圃場のみの数値ではなく、他の圃場も合わせた数値です。

※玄米水分は15.0%で計算しています。

◎来年に向けて

来年度も引き続き米価の低迷が見込まれます。対策として、別添の長生版飼料用稲栽培暦等を参考にいただき、米価に左右されず安定した収入が見込める「飼料用米」の生産も検討してください。

厳しい状況が続くところですが、今年の反省などを踏まえて、改めて基本的な栽培管理の見直しや病害虫防除などを適切に行い、今年を上回る収量と品質の確保に努めましょう。

成員の越冬を許すな！！～ジャンボタニシ秋冬対策～

○水稲に対して大きな被害をもたらすジャンボタニシ(スクミリングガイ)は、水田の水がなくなると土中に潜り、水田内で越冬します。越冬した個体は、翌年の田植後に被害をもたらします。翌年の被害を減らすためには、秋冬で水田内の越冬する個体数を減らすことが重要です。

被害が大きい水田からチャレンジ！！

ゆっくり
細かい
耕うん



石灰窒素
散布

稲を食べるのは、主に成貝



写真：ロータリーの刃で破碎された貝
※試験のため、貝を白く着色しています。

対策のポイント

1 耕うんのポイント

耕うんは、ロータリーの刃がジャンボタニシに当たることで一定の殺貝効果があります。また耕うんは、有機物の腐熟促進、多年生雑草防除などにもつながります。ジャンボタニシ防除を目的とした耕うんのポイントは以下のとおりです。

【ポイント1】なるべく土が固くなっているときに耕うんしましょう。

【ポイント2】ロータリーの回転数を上げて(目安:PTO2速)、なるべくゆっくり耕うんしましょう。耕うんの深さは慣行のままで良く、特に浅くする必要はありません。

【ポイント3】秋から春にかけて複数回(3回程度)耕うんしましょう。その都度、土が固くなったタイミングで行うと、効果が高まります。

2 石灰窒素の秋散布のポイント

石灰窒素の散布は、殺貝の効果があります。

【ポイント1】水田をなるべく均平にして、水温17度以上の時期(10月中旬頃まで)に湛水状態(3~4cm)で3~4日放置し、貝を活動状態にさせる。

【ポイント2】石灰窒素を10a当たり20~30kg全面散布し、3~4日湛水状態を保ち、自然落水させる。

※ほ場に水がない場合は、まとまった降雨の後などに取り組む。

※魚介類に影響があるため、石灰窒素を含んだ水を水路に流さない。

※翌年コシヒカリを栽培する場合や粘土質のほ場の場合は、基肥の窒素成分を10a当たり1kg程度の減肥を検討する。